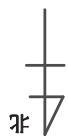


よこそ、 名古屋城本丸御殿へ

内部平面図



名古屋城本丸御殿は、尾張藩主の住居かつ藩の政庁として慶長20年(1615年)、徳川家康の命によって建てられました。昭和5年には、天まで絢爛豪華に飾られ、建築・絵画・美術工芸史において高く評価された守閣とともに城郭として初めて国宝に指定され、屈指の名城として知られています。復元にあたっては、江戸時代の文獻や昭和戦前期の古写真により建物のすべてを焼失。復元真・実測図など豊富な資料をもとが待ち望まれた本丸御殿は、平成21年から復元工事が始まり、平成30年6月に完成公開を迎えました。400年の時をこえて、築城当時のまよみがえった美しい御殿建築書院造の建造物で、総面積3,100㎡を、心ゆくまでお楽しみください。

名古屋城 本丸御殿

THE NAGOYA CASTLE
HONMARU PALACE



本丸御殿ご観覧時のお願い

本丸御殿は、貴重な復元建物です。美しい状態で将来へと受け継いでいくため、建物内では次のことにご協力をお願い致します。



- 室内では照明を控えていますので、頭上・足元にご注意ください。
- 御殿入口で靴をお脱ぎいただきます。
- 御殿内には冷暖房やトイレ、授乳施設などを設置していません。
- 天候等により公開を中止する場合があります。

玄関 ～美しい唐破風の奥に虎と豹がじっと睨む～



本丸御殿を訪れた人がまず通され、対面を待つ殿舎。玄関と言っても、一之間(18畳)・二之間(28畳)の二部屋からなり、一之間には床や違棚もついており、四周の壁や襖には、竹林と勇猛な虎や豹などが描かれた金地の障壁画『竹林豹虎図』が飾られています。

表書院 ～花鳥・麝香猫が彩る正式な謁見の間～



正式な謁見(対面儀礼)に用いられた、本丸御殿内で一番広大な建物。上段之間(15畳)・一之間(24畳半)・二之間(24畳半)・三之間(39畳)・納戸之間(24畳)の五部屋からなり、江戸時代には広間と呼ばれていました。上段之間は徳川義直が着座した部屋で、床と違棚、付書院・帳台構といった正式の座敷飾りを揃えています。

対面所 ～身内だけが立ち入れる、豪奢かつ私的な殿舎～



藩主が身内や家臣との私的な対面や宴席に用いた建物。上段之間(18畳)・次之間(18畳)・納戸一之間(24畳)・納戸二之間(24畳)の四部屋からなり、上段之間と次之間の障壁画は『風俗図』と呼ばれ、京都や和歌山の四季の風物や名所がおだやかな筆致で描かれています。

上洛殿 ～細部まで豪華絢爛。技術と贅の粋～



1634年(寛永11年)の三代将軍家光の上洛に合わせて増築された建物で、上段之間(15畳)、一之間(18畳)、二之間(22畳)、三之間(21畳)、松之間(20畳)、納戸之間(10畳)の六部屋からなります。襖絵・天井板絵や、豪華絢爛な彫刻欄間、飾金具等で彩られ、贅の限りを尽くしていました。王の正しい行いを描いた障壁画『帝鑑図』や『雪中梅竹鳥図』は、当時33歳の狩野探幽によるものです。

湯殿書院 ～将軍が湯を愉しみ英気を養う寛ぎの空間～



将軍専用の風呂場。現在のように湯船はなく、外にある釜で湯を沸かし、湯気を引き込むサウナ式蒸風呂でした。浴室(湯殿)だけでなく、上段之間・一之間・二之間からなる、格式高い書院造の殿舎です。

黒木書院 ～質の高い松材を用いた落ち着いた空間～



本丸御殿のほかの部屋は総檜造りであったのに対し、この部屋には良質な松材が用いられ、その用材の色から黒木書院と呼ばれるようになりました。落ち着いた風情のある黒木書院の襖絵には、風格のある水墨画が配されています。清須城内にあった家康の宿舎を移築した殿舎とも伝えられています。

見どころ ～「天井」「欄間」「飾金具」「障壁画」の変化に注目～



本丸御殿の建築様式である「書院造」では、部屋の格式や用途によって、天井や欄間、飾金具、障壁画などのつくりや意匠が大きく変化します。江戸時代初期に完成したといわれる武家風書院造の様式美と、現代の職人による匠の技にご注目ください。

本丸御殿音声案内ガイド (日本語・英語・中国語・韓国語)

本丸御殿の歴史や見どころなどを、わかりやすく紹介しています。
料金: 1回100円 貸出場所: 本丸御殿内受付